高橋五郎の神道理解

――『神道新論』と『諸教便覧』を中心に――

洪　伊杓

はじめに

英文学者また翻訳者として知られている高橋五郎（一八五六―一九三五年、本名は吾良）は、明治時代の代表的なキリスト者の一人に数えられる。若年期に漢学や仏教を学んだ高橋は、一八七三年に上京して横浜バンドの植村正久と知り合い、ブラウン塾で英学を本格的に学んだ。受洗した一八七四年からブラウンの指導の下で聖書翻訳作業に従事し、一八七九年にはJ・C・ヘボンの補佐として松山高吉などとともに新旧約聖書の翻訳に多大な貢献をなした。彼はキリスト教弁証家として『仏教新論』（一八八〇）、『仏教新解』（一八八三）[1]、『神道新論』（一八八〇）、『諸教便覧』（一八八一）などを刊行しつつ、比較宗教学の先駆者になる。特に『神道新論』と『諸教便覧』の神道の章は、明治キリスト者の「神道理解」を解明するためには欠かせない。

高橋の著作は、宣教師であるG・エンソルが著した『神道辨謬』（一八七一）よりは十年ほど遅く発表されたが、日本人キリスト者として神道を考察した点においては先駆的なものである。また、国学者出身の松山高吉[2]が発表した「日本の神道」（一八九〇）や「神道起原」（一八九三）よりも十年以上早い時期に出され、海老名弾正が神道について述べた「日本宗教の趨勢」（一八九六）や「神道の宗教的精神」（一八九七）よりも十五―二十年ほど前に出版された[3]。高橋は最初の改宗者として、神道とキリスト教は両立できない全く異なる宗教である点を明らかにした。すなわち、キリスト教を全面的に肯定するため、代表的な伝統宗教である神道を全面的に否定する立場を示した。彼の著作は、明治期のキリスト教界では唯一の権威ある神道に関する指針となり、明治期の一般キリスト者の神道認識に大きい影響を及ぼした。したがって、高橋の神道理解は、牧師であり神道専門家（国学者出身）である松山、また牧師であり神学者である海老名と比較して、近代知識人としての明治キリスト者の典型的な神道に対する姿勢を解明するための手がかりとなる。その意味で、高橋の『神道新論』と『諸教便覧』を分析することは明治キリスト者の神道理解の全体像を考察するためにも必須の課題であり、本稿はこれまで研

究が不十分であったこの問題に光をあてる試みである。

一　G・エンソルの『神道辨謬』（一八七一）の影響と継承

一八六八年、明治政府は神仏判然令（廃仏毀釈）により既存の支配宗教である仏教を弾圧し、神道の国教化政策を展開した。[1] この政策を国民に説得するために一八七二年から大教宣布運動を企画し、新設された教部省は国民教化の基準として「敬神愛国（第一条）、天理仁道（第二条）、奉戴皇上遵守朝旨（第三条）」の「三条規則」を制定した。[5] しかし仏教側の反発と西欧の伝統における信教の自由の要求などにより混乱が続いた。一八五九年に長崎に初めて到着した聖公会のウイリアムズ（Channing Moore Williams）が、一八六八（明治元年）十二月に本国に送った報告書をみると、「近頃此國に於て、大に古神道を振作せんとの努力行はれ（略）寺院は知事の命に依りて全然破壊せられ、而して神道の徒は大活躍を起こし、新しき神宮を建設し、特に集会を開きて公然説教致し居る由に候（略）仏教を圧迫して神道を奨励するは基督教の為めに有利なるべく候[6]」とし、その局面をキリスト教の勢力拡張のため注視し、敏感な態度を示した。キリスト教を異端視する風潮が強かった状況の中で、このように勢力を急速に拡大して行った神道に対する論駁は緊急な課題として認識されたに違いない。

その結果、一八七一年に長崎地方で活動した聖公会の後任宣教師G・エンソル（George Ensor）が『神道辨謬』を著し、神道に対する論駁を試みた。すなわち、神道とキリスト教を対峙させ、キリスト教の優越性を強調する目的で書かれた布教書である。当時、東アジアにおいてキリスト教側が最も警戒し、論駁すべき伝統宗教は仏教だったが、これに関してはすでに中国でエドキンス（Joseph Edkins）が著した『釈教正謬』が編纂されていたので、日本でもそれが仏教に関する論駁の良い指針になっていた。したがって、G・エンソルは『神道辨謬』を執筆してもう一つの有力な伝統宗教である神道に対する論駁の指針を準備していったのである。

管見の限り、この書物に関する唯一の研究は、吉田寅による論文「『神道辨謬』とその反響」（一九九〇）[8] である。ここで吉田は、エンソルが神道に着目した理由について「神道がキリスト教の教理をもとり入れる試みをおこなっており、明治に入ってからは、政府の神道興隆政策を承けて、神道の勢力が次第に増大してきた故に、キリスト教側に

とって、神道対策の重要性は極めて大きなものとなった[9]」と指摘した。すなわち『神道辨謬』は「神道のキリスト教利用[10]」の影響を警戒して書かれたものと理解できる。

明治期のプロテスタント受難者である二川（小島）一騰が日本語の執筆と校正を担当し、全面的に協力したこの書物は、ある神道家とキリスト教信徒が対話する形式で構成されている。したがって、この著作は明治初期におけるプロテスタント教会と神道との思想的対決をよく示していると言える。それにも拘らず、神道に関する理解はごく皮相的な段階に留まっていたので、神道の本質を正面から扱うには限界があったという評価を受けている。しかし、当時の神道界のみならず仏教界からも「エンソール、神道辨謬相著出し候。右は皇道神道を破斥せしもの也。長崎の宣教師（使）大心痛、有志諸僧官員と相談[11]」と記されているほど大きな反響があり、吉田もこの書物に対して「同じ写本がかなり広く流布したことは十分推察される所である[12]」と指摘している。

吉田によると、現在確認出来る筆記写本は、吉田寅が所藏している「高永本」と一九四二年頃に徳重淺吉が神宮皇学館大学（三重県伊勢）に寄贈し、その後名古屋大学図書館に移管された「名古屋大学本」の二冊がある。内容はほとんど類似するが、筆写のため表現上の相違点や章の区分が異なる。それを念頭において『神道辨謬』高永本の章の区分に基づいてその内容を概観すると次の通りである（文章は「名古屋大学本」から引用する。—筆者註）。

第一「破親國」において日本が万国の祖先の国であるという神道側の主張について、日本が「真の親国ナラバ（略）日本ハ支那ヨリ字ヲ受（ケ）タル故支那ノ後ニ闘ケタルト見ルナリ[13]」とし、日本も中国や西洋の文化と遺産を摂取しつつ造られて来たと反駁した。第二の「破記事謬伝」においては皮相的な説明に留まっているが、第三の「述三柱無始」においては、「コノ三柱ノ神ハ、万神ノ前ニ在セシナリ。其三神ノ神ハ始メアリヤナキヤ[14]」とし、「天之御中主神・高御産巣日神・神産巣日神」のいわゆる「三柱の神」を日本で表現された「創造神」としての性格があると認めるように述べている[15]。続いて第四「破二神非全智全能全善」で創造神（三柱の神）とは区別される二神には「全智全能全善」を認めることが出来ないと言う。第五の「破大皇神非日輪」では、これと同様に当時の日本が最も崇敬していた天照大神について次のように批判し、それが太陽の源泉であるという神道側の主張を一蹴した。

「天照大神ハ日本ニ生レシト古事記ニ誌シアレドモ、

此古事記ハ聞伝ナリ。(略)天照大神ハ日本ノ人ヲノミ、別シテ愛シ恵ムト云フ証拠ハ少シモ不見。(略)夫レ日輪ハ、万ノ国々、偏ク照シテ一切ノ人間ヲ養ヒケル。此我等ガ信ズル真ノ神造リ玉ヒシ光リナル故、万国人間ヲ照シ養(フ)ナリ」[16]

このような観点は、日本の神道を「無名の宗教」と「有名の宗教」に区分し、「無名の宗教」としての時期をキリスト教の創造神概念と類比させた松山高吉と共通する点である。しかし、松山が明確な時期区分を通して神道の堕落の歴史を明らかにしたことと比べ、エンソルは皮相的で漠然としていると言える。

またエンソルは、第六「破古事記非教人書」において、神道の経典のように扱われているこの書物は倫理や道徳の教訓を含んでいないので、「経典」としての価値がないと判断し、キリスト教の聖書と根本的な相違があると評価した。第七「破日本古無神」では、日本には三柱の神という「真の神」に近い神概念があったが、現在は日本国を初めて開いた人物を神と誤認してしまい、事実上日本には「真の神」が存在しない国になったと説明する。

その後、第八「述国掟神掟」からは神道に対する論駁というよりはキリスト教の優越性を示す弁証論的な内容になっている。そのためエンソルは「日本(神道)の教」(神道)と「真の御教」(キリスト教)、また「神道の神々」と「真の神」を対比して説明している。特に第九「示三柱唯一神」ではキリスト教の信仰が「三柱の神」を根本にしている神道の祖先尊崇の観念と対立しないと強調し、神道に慣れている日本人がキリスト教を違和感なく受容出来るように誘導しようと試みた。これは、神道の神概念が浸透している日本人にキリスト教の神を説明するため、日本の太古の時期にもキリスト教の神と対立しない連結可能な段階が存在したとの見解である。

「日本ノ人ハ、人間ノ造リタル教ヲ信ジテ、真ノ神ノ御教ヲ信ゼヌナリ。但シ真の神ト申スハ、古事記ノ初ニアル三柱ナルベシ。コノ三柱ノ御教ヲ聞テ信ズルナラバ、真の神国トナルベシ。(略)コノ国ノ人ハ、皆源ノ三柱ヲ信ジ(略)西洋ノ人、此三柱ヲ信ズル事アルヤ。『三柱ヲ拝マズ。但シ真の神ト申スハ、普ク世界ニ唯一神ニテ、外ニアル事ナシ。』」[17]

しかしエンソルは、究極的にキリスト教の神こそ「真の神」であるということを示すためにこのような主張を展開した。「真の神」として想定出来る概念は日本でも「三柱の神」として存在したが、それは喪失され現在の日本には「真

の神」が存在していないという論理である。したがって、日本において唯一神・創造神を回復するためには、キリスト教の「真の神」を受け入れるしかないという結論に至る。実に『神道辨謬』には、キリスト教とキリスト教の神(God)を意味する「真の（神の）御教」や「真の神[18]」という表現が合計二十五回も登場する。

二　高橋五郎の神道理解とキリスト教との関係認識――『神道新論』と『諸教便覧』を中心に

明治初期を通して、G・エンソルが著した『神道辨謬』（一八七一）は唯一の神道に関するキリスト教側からの論駁書であった。しかし九年後、横浜バンドを基盤として活動したキリスト者である高橋五郎が『神道新論』（一八八〇）と『諸教便覧』（一八八一）を出版し、近代知識人としての日本人改宗者が神道を正面から新たに考察し、明治キリスト者のための神道に対する主な指針書になった。西洋宣教師の立場と同調し、キリスト教の優越性を強調した高橋五郎は、基本的にはG・エンソルの立場を継承しているように見える。本章では高橋の神道に関する代表的な著作『神道新論』と『諸教便覧』を中心にいくつかの項目によって高橋の神道論を分析する。

(一)　開化時代における神道はどのような宗教なのか？――「良教」と「妄教」の区分

高橋は『神道新論』の序文で「神道の教えがこの開化の時代に善事を行っていない」と、神道は良き教えがないわけではないが、それが開化のために最も尊ぶべきものではないとみなす。

「是レ神道ノ教ノ世ノ開化ヲ防グル事鮮カラザレバナリ（但シ神佛ノ教ハ古来一ノ善事ヲモ世ニ顕ハシタル事ナシト言フニハ非ズ[19]）」

この翌年、神道、仏教、バラモン教、道教、耶蘇教、回教など六つの宗教を比較しながら著した『諸教便覧[20]』の緒言においても、開化したこの時代の宗教は、人間の幸福を完成するために必要な道であることを述べ、「良教」と「妄教」を明確に区別した。

「伝道者ハ如何ナル教ニ属シ如何ナル教ヲ伝フルモ皆自己ノ伝宣スル所ヲ以テ無比ノ良教ト明言シ人ヲ誘テ其道ニ入ラシメントス然レバ　世人如何シテカ眞實ノ良教ヲ知ル事ヲ得ン　皆相率テ偽教ニ甘言ニ就クモ知ル可ラズ仰モ宗教ハ人類ニ最大幸福ヲ與フル者ト言

フナルニ若シ人誤テ妄教ニ従ハヾ其望ム所ノ幸福ハ得ズシテ反ツテ取ルニ至ル可シ」[21]

また、高橋は基本的に神道が明確な経典や教理を持っていないので、宗教としての基本条件に欠けていると考える。神道が活用している神典とはすなわち神伝に過ぎず、これが神道の経典として成立するにはあまりにも稚拙な考えであるとみなす。[22] また、「神伝古説は其起り古きに随つて其解釈容易ならず又其世を経ること久しきに随つて其意義を失ふこと大いなる者なれば我神典の伝説も始より終まで尽くを解き得らるゝ者に非ず」[23]と、神道の経典として古事記や日本書紀を用いるにしても、それは古き時代のものであり、また長い時を経て伝えられてきたものであるため、その意義を完全には伝えきることができない。このように、高橋は宗教としての基本的な構成要件が神道に欠乏していると考え、近代日本の開化時代には不適当な宗教で、結局「良教」ではないと判断したのである。

以上のように、高橋は近代国家になった明治日本において、神道は果たして「良教」なのか「妄教」なのかという問いを投げかけている。このような観点は、近代知識人としての明治キリスト者の相当数が、いわゆる「社会進化論」や「宗教進化論」を受け入れ、日本の近代化のため必要な高等宗教を「良教」として受容し、悪影響を及ぼすと考えられた前近代性の迷信や多神教的部分は「妄教」として捨てなければならないという明確な立場を示したと考えられる。

(二) 神道の歴史に関する認識
――「古人の神道」と「後世の神道」の分類

高橋は「神道といふ語には二種の意義あり其第一は古人が此語を用ひ始めたる時に之に付けたる者其第二は後世に至りて神官等が是を一教一道と誤認して之に與えたる者なり」[24]とし、神道を二つに分類している。すなわち、一つは古人が神道という言葉を使用し始めた時の神道として、純朴単純な段階の原始神道を意味する。もう一つは後世に至って神官が、この世のあらゆる教えや道理の中で、有力な意味を持つ所謂「一教一道」としてそれを誤認し、新たな「神祭」(神を祭る神道の儀式)として構築された神道であるとする。この誤認されている神道こそ経典を持たない神道であり、それをあえて称えるならば「神伝」というべきであるとする。この「神伝」とは神の業を伝記したものに過ぎず、まさに外国の「神話」と同等であるとみなす。

「我神道ノ説若シ神道ニ非バ其説ハ何ト称ス可キ者

ナルヤト云フニ是レ実ニ神伝ト名ク可キ者ナリ（神伝ノ伝ハ神仙伝ノ伝ト同ジクシテ神ノ事業等ヲ伝記シタルヲ云フナリ英佛等ノミトロジト同義ナリ）[26]」

また、『諸教便覧』において神道を扱った章では、『神道新論』（一八八〇）の執筆目的が誤認された神道を批判するためであることが明らかにされている。

「神道新論ノ第一章ニ於テ神官等ガ神道トイフ語ヲ用フル事ノ非ナルコトヲ詳カニ論ジテ其誤謬ヲ矯シタリ、抑我國ノ所謂神道ハ基本ハ純朴無為ノ意ニシテ機巧有為ニ対セル者ナレバ其実ハ太古之風ト解釈ヲ下ス可キ者ナリ是故ニ古ノ人之ヲ唯神ト称セリ[26]」

そして、神話に過ぎない日本の古伝説（日本書紀、古事記）を儒教や仏教と並べ、神道と呼びながら後世に、神職神官が神道を歪曲させていった事を「妄造ニ由ル」誤謬の結果であると批判している。また、その「伝説ノ誤解」から生じた誤謬を正そうとすると、「不忠の大罪人」になってしまう現実も指摘する[27]。

「神道ノ本義ハ斯ノ如クナリシト雖モ後世ニ至リテ神祭ニ従事スル者ドモハ古事記日本紀等ニ見エタル我國ノ古伝説ヲ一ノ教ト認メ之ヲ儒道仏道ニ並ベテ神道ト呼ビ做セリ此ニ至リテ神道ノ意義一変シヌ此事固ヨリ神職等ノ誤謬或ハ妄造ニ由ルト雖モ亦神官等ヲ誘ヒテ是ノ如ク為サシメタル者アルナリ然ラバ其之ヲ誘ヒタル者ハ何ゾヤ即チ古事記日本紀等ノ書ニ見エタル我國ノ古伝ノ誤解是レナリ、余敢テ神道新論トイフ書ヲ著シテ我國ノ古伝説ノ本意真義ヲ解キ明カシタリ[28]」

この点は、前述したG・エンソルが「三柱の神」を日本で表現された「創造神」として認め、その後から登場した神道における様々な神の存在を否定した姿勢、すなわち日本の太古の創造神概念の源泉とその後歪曲された神道の歴史を区分するように見える点は高橋と類似する。また、「日本固有の宗教あり、即ち神道の起原にして神道は謬誤に謬誤を加へ生じて成れる者[29]」であり、また「今の世に神道々々と言ののしる神道はみな後人の所造と知るべし[30]」と近世の神道とは後代に造られ、日本固有のものとは異なるものになったと主張した松山高吉の神道理解とも類似する。松山は近代天皇制（皇室神道・国家神道）を含む後世の神道が歪曲、変質されたことを批判した。松山は、「創造主への信仰」があった第一期の神道が、第二期に天神地祇を祭ること、第三期に宮を造り、又鏡をもって天照大神を祭ることとなり、結局、「無霊無活の物質を以って神として崇め祭ること[31]」に転落したと批判し、近代天皇制の根幹になる天照

大神とキリスト教の神との間にも一線を引いている。

このように高橋も、G・エンソルや松山と同様に神道の歴史を大きく二つの時代的な類型に区分し、素朴な原始宗教であった神道が、堕落、歪曲されて行った結果、現在の姿になったことを批判しつつ否定している。ここで高橋も「天地ノハジメノ時高天ノハラニ成リセル神ノ御名ハ天之御中主神次ニ高御産霊神次ニ神御産霊神此三柱ノ神ハ皆獨リ神ナリマシテ御身ヲ隠シタマヒキ次ニ國ツカク浮脂ノゴトクシテ海月ナス」[32]とし、天地創造が成し遂げられた時の神の名を、G・エンソルや松山のように「三柱の神」であると説明している。また天照大神を、「天照大御神成出デ右ノ目ヲ洗シ時（略）古傳ノ誤解ヨリ真ノ天日ト天日ノ名アリシ人トヲ混同セル者ナレバ是ノ如キ相違ノ説アルナリ」[33]や「天照大神ガ岩屋隠レノ事アルヲ見レバ彼等ガ真ノ天日ト彼女主トヲ混同シタルコト益明カニ顯ハルルナリ」[34]とし、日本国建設時から強調され始めた天照大神への崇敬が「真の天日」、すなわち天地創造の日を混同させることになったと指摘する。続いて「其祖先ヲ神ト稱シ亦自ラ神ト號シタルガ故ナリ」[35]とし、日本の歴史の中で「神」名称に対する歪曲過程が進んで来たとした。結局、現在の日本が祭る神道における「神」とは、ただ「歴世皇帝ノ神霊」に過ぎないと結論付けた。

「此神トハ如何ナル神ヲ指ス者ナル乎若シ（略）造物主トセバ我神道宗ハ耶蘇宗ト其区別ヲ失ウニ至ラン（略）歴世皇帝ノ神霊ヲ指ス者ナル乎歴世皇帝ノ神霊ヲ指ス者ナラバ我政府ハ教導職ニ命ジテ我國歴世皇帝ノ神霊ヲ敬崇セヨト令スル[36]」

しかし高橋の場合は、G・エンソルのように「三柱の神」をキリスト教の「真の神」と連結させる試みまでは見せていない。また松山のように日本宗教史研究において神道の歴史を綿密に考察してもいない。さらに、高橋が神道の太古の時期を「古人が神道という言葉を初めて使った時代」と表現したことに対して、松山が考案した「無名の宗教として神道」のような論理構造までには至っていない。ただ「純朴無為の時代」として単純素朴なものとして評価し、「神道という言葉の誕生以前」に対するより根本的な次元までの深い考察には達し得ていないようにみえる。

㈢　神道の「神」とキリスト教の「真の神」

――多神教（神道）と唯一教（キリスト教）との接点可能性の一蹴――

結局、高橋は『神道新論』では「諸神[37]」と「神々[38]」とい

う表現を、また『諸教便覧』では「八百万の神」や「千萬の神」「無量の神々」「諸々ノ神」「諸ノ神等（カミタチ）」という表現を使い、神道の「神」概念が基本的に多神教的形態であると強調する。

「神道ノ神（カミ、迦微）ハ已ニ是ノ如キ者ナレバ今日ノ人ガ（略）神道ノ神ハ斯（カカ）ル者ニシテ其数ハ八百萬千萬（ヤホヨロジ・チヨロジ）ト限リナキガ其無量ノ神々ヲ祭ルコトハ神道ノ體ナリ（略）然ラバ其ノ諸々ノ神ヲ祭ルハ何ノ為ナルヤ是ハ其神々ガ禍福ノ權ヲ握リテ之ニ事フル者ニハ幸福ヲ與ヘ之ニ背ク者ニハ災禍ヲ降スニ由ル……其幸福ハ如何ナル者ナルヤト尋ネルニ其ハ皆人ノ情欲ヲアカシ満スノ愉快ヲ指ス者ニシテ」[39]、「神道ノ所謂神トハ如何ナル者ナルヤ迦微（カミ）神トハ天地ノ諸ノ神等（カミタチ）ヲ始メテ其ヲ祀レル社ニ坐ス御靈（ミタマ）ヲモ申シ又ハ更ニモ言ハス（下略）」[40]

また神道には、来世概念はなく、善悪の分別もなく、すなわち道徳仁義もなく、ただ人間の欲望を満足させる快楽の段階に留まっていると考えた。

「神道ノ所謂神トハ如何ナル者ナルヤ（略）斯クノ如ク種々ニテ貴キモアリ賤キモアリ　強キモアリ弱キモアリ善キモアリ悪キモ有リ」[41]、「神道ハ斯ノ如ク未来ノ幸福ヲ言ハザレバ又来生ノ苦患即チ死後ノ刑罰ヲモ説カザルナリ神道ニテ言フ所ノ罰悪ハ時ノ政事ヲ乱ス所ノ事ヲ指ス者ニシテ道徳仁義ニ背クコトヲ指スニハ非ズ」[42]

このように神道の神は「倫理・道徳」の面において善悪の両面性を持っているので「神」は「善キ神」と「悪キ神」の共存する「善悪二神」の宗教であると高橋は説明する。このような神道は根本的に唯一神教にもなれないし、また倫理・道徳の指針を提供すべきである所謂「高等宗教」としての構成要件が最初から欠けていると考えた。

「本居翁ノ言ニ依レバ神ニハ善キモ有リ悪キモ有リト云フ。（略）神ノ御名ハ（略）善悪二神ノ説ト稍似タル者ニシテ其意ハ天下ノ善事ハ皆善神ノ作ス所天下ノ悪事ハ皆悪神ノ作ス所ナリ（略）太古ノ人ハ善悪禍福ノ相追フヲ見テ其善ナルヲバ善キ神ノ所爲トシ其悪ナルヲバ悪キ神ノ所業ト考ヘ（下略）」[43]

「善悪二神ノ説ナリ其餘ハ先祖祭ノ開発セル者ニシテ今日ノ世ニ在リテハ最早言フニ足ラズ且又此善悪二神ノ説スラモ甚ダ模糊タル者ニシテ格別ニ意ヲ用フ可キ者ニハ非ズ」[44]

すなわち高橋は、太古の原始神道の時期から神道は多神

教的・迷信的「神」概念を持っていたと批判し、それに対して否定的な態度を示す。これは原始神道を「無名の宗教」として高く評価し、その太古の原点とキリスト教の創造神の概念を合致させようと考えた松山と区別される。松山は、新しい祭祀や神社建設が具体化される中、無名の宗教であった日本固有の精神が堕落し「有名の宗教」としての神道になってしまったとみなした[45]。すなわち、異質的なものが多く日本固有の本性に不適当だったと評価している。したがって松山は、「固有宗教は名なきを幸ひにしてその力その権能が所有を挙て基督教に譲らん[46]」と述べ、日本を危険に陥れる誤った宗教、すなわち神道を正し、その原型を回復するためにはキリスト教が必要だと結論づけるのである。

この点において多神教的、迷信的な原始神道の低級性を批判した海老名と高橋は類似している。海老名は「日本のプリミティブな精神は極めて幼稚である[47]」、「日本は古来多神教の国であった……斯かる国柄には即ち一神教が最も適当なる宗教である[48]」とした。しかし海老名は高橋とは異なり、「神道の一神教的進化の趨勢[49]」を強調しつつ、「古代の神道」は多神教的であったが「近世の神道」は、一神教的側面が明確になったと考えた[50]。このような姿勢は、結局「近代天皇制」への合一を目指すことになる[51]。

このように神道の多神教としての限界と現在にまで至る歪曲の歴史を指摘した高橋五郎は「真の神」（誠の神）という表現を使う。この用語は、G・エンソルがキリスト教側から神道を論駁するため、すなわち神道の多神教的な「神々」とキリスト教の唯一神としての「真神」を区別するため使った概念である。神道の根本的な問題を批判し、それを打破することによってキリスト教を弁証しようと試みた高橋も、G・エンソルが先駆的に使用し残した「真の神」という概念に着目したのである。それは、高橋の『諸教便覧』の「耶蘇教」の章で繰り返して使われ、明らかになっている。

「其大救主ハ眞神ノ聖子ニシテ即チ神ナルコトヲ言ヒタレバ[52]」、「天地萬物ノ主宰ナル造物主ハ唯一無極ノ眞神ニシテ至聖至義至仁至智至正至徳ナリ實ニ人間ニハ眞神ノ威徳ヲ顯揚スル言語ナク眞神ノ榮耀ヲ模寫スル文調ナシ如何トナレバ眞神ハ無極無涯ニシテ人間ハ有疆有涯ノ小物ナレバナリ眞神ハ是ノ如キ者ナレバ（略）造物主ノ至聖至義ニ相背キ相悖リ相適ハザル事ハ言ヲ俟ズシテ明カナリ既ニ造物眞神ノ意ニ適ハザレ時ハ人類ハ皆造物眞神ノ罰ヲ蒙ラザルヲ得ズ[53]」

高橋は、「眞神ハ（略）人類ヲ救フ方法ヲ設ケ玉ヘリ其救極ノ法ハ愛子耶蘇ヲ降シテ世人ニ代リテ死刑ヲ受シメ其功徳ヲ以テ世人ノ罪ヲ宥ス事是レナリ[34]」とし、人類を救うため神が耶蘇としてこの世に降誕し、人類の罪を赦したというキリスト教の基本教理を説明しながら、「真の神」という意味で「眞神」という言葉を使っている。これは、神道の「神」は「真の神」ではないという否定の立場を含蓄しているのである。

㈣　国学者の誤謬を批判

高橋は、「従来の國学者多くは文字学士にして終に其誤謬の説を取るに至れり[35]」とし、国学者が行っている諸説の誤謬を積極的に批判している。次のように国学者の反省を促すほど、彼の国学者への不満と批判意識は強かった。

「願クハ國学者ヨ速ニ正道ニ帰リテ復妄説ヲ宣テ人々ヲ惑ハスコト勿レ誤謬ト知リタル後チ尚ホ其誤謬ヲ隠シテ之ヲ人ニ教フルハ是レ天稟ノ徳性ニ愧ル所ナラズヤ実ニ是レ恥ザル可ラザル事ナリ是故ニ余ハ彼人々ガ速ニ其誤謬ヲ棄テ、是ノ如キ事ドモヲ早ク歴史上ノ一話トナラシメンコトヲ望ムナリ[36]」

さらに、「今の國学者は仮令心には神道と云ふ語の不当を知るも佛道儒道等に敵せんが為に自を甘じて神道と云ふ語を用るなり[37]」と平田篤胤や本居宣長などの国学者が唱える神典と神道との関わりについて、それを否定しようとした。神道は古伝の誤解から生まれたものとして、造物主と造物主の名を借りた人間とを混同してしまっていると指摘する。

「古伝ノ誤解ヨリ眞ノ天日ト天日ノ名アリシ人トヲ混同セル者ナレバ是ノ如キ相違ノ説アルナリ[38]」

同時に、当時の神官の布教に対する姿勢は積極的で多分に宗教的でありながら、神官はその宗教的性質を否定するという矛盾の中にあることを指摘する。また、三教規則第一条「敬神」概念における「神」が、万一キリスト教徒が語る「神」のような造物主を語っているならば、それは明らかに宗教でありキリスト教と区別され得ないことを示し、国学者の観点に影響を受け、神道国教化の下で展開された「神社非宗教論」を批判する[39]。

「神道ハ儒佛ト共ニ鼎足ヲ為シテ欠ク可ラザル者ナリト古来人ノ言伝フル道ニシテ我國体ニ大関係アリシ者ナレバ諸教ニ先ヅ神道ハ宗教ト名ク可キ者ナルヤ否ヤト問ワンニ識者ハ皆之ヲ以テ宗教ニハ非ラズト為ラル可シ聞ク所ニ依バ神官諸氏ノ中ニモ学識アル者ハ之

ヲ宗教トハ認メラレズト云フ神道若シ是ノ如ク宗教ニ非バ是ヲ宣伝スルハ其当ヲ得ザルガ如シト雖モ神官諸氏ハ皆之ヲ宣べ伝フルヲ善シトセラル」[90]

このような国学者に対する高橋の批判的姿勢は、松山や海老名が平田や本居などの国学者の教えを基本的に肯定してキリスト者として新しく神学化したのとは根本的に異なる面である。

おわりに

高橋は世界諸国の古伝と対比して日本神伝が持つ「無稽性」を強調しつつ、「日の御子」説も批判し、唯一の創造主のみ「真の神」であることを説いた。これは、天皇絶対制が構築されつつある時期にキリスト教側からの神道批判として注目された[91]。そのような立場は、一八七一年にG・エンソルが著した『神道辨謬』の観点を継承していると言える[92]。『神道辨謬』は神道に対する論駁を目的として書かれたキリスト教布教書であるが、神道に関する理解はごく皮相的な段階に留まっていた。したがって、神道の本質を正面から扱うには限界があった。高橋はその意味で、明治キリスト者の神道理解の次元をより深めたと評価できるものの、キリスト教は「良教」であり、神道は「妄教」であると自らの信仰を言い表すにとどまっている。

さらに、『諸教便覧』の「耶蘇教」という章では、高橋は「佛徒神官等ノ中ニハ無根ノ忘言ヲ吐テ耶蘇教ヲ誣ル者アリ大ニ世人ヲシテ其判断ヲ誤ラシム是実ニ嘆ズ」[93]とし、『神道辨謬』以後からより高まっていた神道と仏教側からのキリスト教に関する誹謗についても残念がりながら、「英米二國ノ教師ガ傳フル所ハ全ク其教ノ經典ニ依ルナレバ眞ノ耶蘇教ナリ」[94]とし、新教（プロテスタント）こそ「真ノ耶蘇教」と結論づけている。高橋は、ステイシエン（Steichen, Michael A.）神父を助けて、カトリックの最初の『聖福音書』（上下巻）を翻訳したほど、カトリックとの協力作業にも邁進したが、横浜バンドの一人として、英米のプロテスタント教会に優越性を認めていた。

以上より、小崎弘道が「高橋氏は、『仏教新論』と『神道新論』の二書を著作出版せられたのは当時の基督教徒に取りて有益な書と認められたものである」[95]とし、伝統宗教からの圧力の中で、悩んでいた明治キリスト者が自らを弁証する論理を提供したと高く評価したことはきわめて適切であると言える。また、『高橋五郎』の評伝を著した桜井吉松は、「高橋五郎は耶蘇教徒たり基督徒たるの点に於ては絶対

的賛同を表するものなり」[66]と述べ、高橋がキリスト教側の立場で弁証を展開した点を指摘している。このように高橋は宣教師と密接な関係を結んでいた横浜バンドの代表者として、原始および古代神道はもちろん近世に新たに構築された復古神道や当時の国家神道（近代天皇制）についても、それらを批判する立場を固持しつつ、キリスト教の優越性を排他的に強調する弁証家として神道を理解したのである。高橋の神道理解は、国学者出身の松山や神学者であった海老名という二人が神道に関する論説を発表するまで、明治キリスト者の神道理解の典型として影響を及ぼしたものであって、その意義は十分に評価されるべきであろう。

註

(1) 高橋五郎の仏教に関する立場は、星野靖二「明治十年代におけるある仏基論争の位相――高橋五郎と蘆津実全を中心に」『宗教学論集』第二六号、駒沢宗教学研究会、二〇〇七年、三七―六五頁。を参照。

(2) 松山高吉の神道理解に関する筆者の拙稿は次の通り。洪伊杓「松山高吉と海老名弾正の神道理解に関する比較分析」『基督教学研究』第三十四号、京都大学基督教学会、二〇一四年十二月、六七―七九頁。洪伊杓「松山高吉と植村正久の関係形成過程とその意味」『キリスト教史学』第六九集、キリスト教史学会、二〇一五年七月、一七八―一九六頁。

(3) 海老名弾正の神道理解に関する筆者の拙稿は次の通り。洪伊杓「海老名弾正の神道理解に関する類型論的分析」『アジア・キリスト教・多元性』第十二号、現代キリスト教思想研究会、二〇一四年三月、一―一七頁。洪伊杓「海老名弾正をめぐる「神道的キリスト教」論争の再考察」『アジア・キリスト教・多元性』第十三号、現代キリスト教思想研究会、二〇一五年三月、五三―六五頁。

(4) 村上重良「未完の宗教政策」『神と日本人――日本宗教史探訪』東海大学出版会、一九八四年。

(5) 村上重良「天皇制と国家神道」、丸山照雄編『天皇制と日本宗教』亜紀書房、一九八五年。

(6) 元田作之進『老監督ウイリアムス』、一九一四年、八二頁。

(7) 明治期のプロテスタント受難者である二川（小島）一騰が全面的に協力したこの書物は、ある神道家とキリスト教信徒が対話する形式である。

(8) 吉田寅「『神道辨謬』とその反響――付『神道辨謬』二写本対校」『立正大学大学院紀要』第六号、立正大学大学院文学研究科、一九九〇年、五七―七九頁。

(9) 吉田寅「『神道辨謬』とその反響――付『神道辨謬』二写本対校」、五八頁。

(10) 吉田寅はその例として、南里有鄰の『神理十要』やプロテスタント宣教師マルティン（W. A. Martin）の『天道溯原』を提示している。

(11) 徳重淺吉『維新政治宗教史研究』目黒書店、一九三五年、五二四頁。

(12) 吉田寅「『神道辨謬』とその反響――付『神道辨謬』二写本対校」、五九頁。

(13) G・エンソル（George Ensor）『神道辨謬』（名古屋大学本）、二頁。

(14) G・エンソル前掲書、六頁。

(15) 「創造神」において、「天之御中主神」を中心とする「三柱の神」を認めるG・エンソルの姿勢は、高橋五郎以後、神道に関する論説を積極的に発表した国学者出身の松山高吉の考えと類似する。これに関しては洪伊杓の拙稿「松山高吉と海老名弾正の神道理解に関する比較分析」、七〇―七二頁を参照。

(16) G・エンソル前掲書、一二頁。

(17) G・エンソル前掲書、一五頁。

(18) 『神道辨謬』（高永本）には、「誠の神」と「真の神」が混在している。

(19) 高橋吾良『神道新論』（序）、東京、高橋吾良、一八八〇年、二頁。

(20) 「宗教ハ神道、仏道、婆羅門教、禅那教、琳愛謁教、道教、耶蘇教、回回教、等ナリ又仏教ノ下ニハ天台宗、真言宗、禅宗、浄土宗、浄土真宗、法華宗等ノ本意ヲ述ブ若シ此小冊ヲ以テ数人ヲ益スル事ヲ得バ満足ノ至リナリ」（高橋吾良『諸教便覧』（緒言）、十字屋、一八八一年、四頁）。

(21) 高橋吾良『諸教便覧』（緒言）、十字屋、一八八一年、三頁。『諸教便覧』は、下記の史料集を参考した。島薗進、高橋原、星野靖二編集『シリーズ日本の宗教学④：宗教学の形成過程』、第3巻「諸教便覧、神道新論、仏教新論ほか」、東京、クレス出版、二〇〇六年。

(22) 「我國ノ神典ノ説ハ実ニ是等ノ神伝ト同種ノ者ニシテ却テ是等ノ説ヨリハ巧ニ造リタル者ナリ我國ノ神典説ハ神道ニ非ズシテ神伝ナルコトヲ会得セラレタルナル可シ」（高橋吾良『神道新論』「第一章」、六頁）。

(23) 高橋吾良『神道新論』（第一章）、一九頁。

(24) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、六頁。

(25) 高橋吾良『神道新論』（第一章）、三頁。

(26) 高橋吾良、『諸教便覧』（第一神道）、七頁。

(27) 「偖是ノ如ク古ヨリ信ジ来リシ所ノ事又之ニ由テ君臣ノ分乱レズシテ今日ニ至リシ所ノ事ヲ以テ余今誤謬ニ出タル事ヲ為サバ人或ハ余ヲ指シテ不忠ノ大罪人ト言ハン然ドモ余ハ甘心シテ其謗ヲ受ルコトヲ能ハズ是レ吾身其罪ニ当ラ

ズト信ズレバナリ余今今日マデ人々ガ是ノ如ク信ジ来リシ所ノ事ハ全ク伝説ノ誤解ニ出タリト曰ハントスト雖モマタ是ノ如ク畏敬シ来リタルハ実ニ当然ノ事ナリシト曰フナリ」（高橋吾良『神道新論』（緒言）、三頁）。

(28) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、一〇頁。

(29) 松山高吉「神道起原」『同志社文学』、一八九三年（明治二六）第七七―七八号、七七頁。溝口靖夫『松山高吉』、松山高吉記念刊行会、一九六九年、二六二頁。

(30) 坦庵居士（松山高吉）「日本の神道」『六合雑誌』、第一一五号、一八九〇年（明治二三）、二六二頁。

(31) 松山高吉『日本宗教史』（同志社神学校講義録、未刊行）、第三期。溝口靖夫、前掲書、三四頁。から再引用。

(32) 高橋吾良『神道新論』、二〇―二一頁。

(33) 高橋吾良『神道新論』、四九頁。

(34) 高橋吾良『神道新論』、五四頁。

(35) 高橋吾良『神道新論』、五二頁。

(36) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、五頁。

(37) 高橋吾良『神道新論』、五五―五六頁。

(38) 高橋吾良『神道新論』、七一頁。

(39) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、一五―一六頁。

(40) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、一四頁。

(41) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、一四頁。

(42) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、一九―二〇頁。

(43) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、二三―二四頁。

(44) 高橋吾良『諸教便覧』（第一神道）、二五―二六頁。

(45) 「其無名宗教が世と共に変遷して其形を種々に化し有名宗教即ち神道なる者となり其神道また分れて数派の流をなし遂に今日の姿に及べる沿革の次第を述ぶるべし」（松山高吉『日本宗教講義』、三八頁）。

(46) 松山高吉「神道起原」『同志社文学』（第七七―七八号）、二七七頁。

(47) 海老名弾正著『新日本精神』、八頁。

(48) 海老名弾正「日本固有の敬神思想」『基督教十講』警醒社、一九一五年、二七八―二八〇頁。

(49) 海老名弾正「神道の宗教的精神」『六合雑誌』第一九八号、一八九七年。

(50) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、一九八〇年、一七四―一七五頁。

(51) 海老名弾正の原始神道に対する姿勢については、洪伊杓「松山高吉と海老名弾正の神道理解に関する比較分析」、六九―七〇頁。洪伊杓「海老名弾正の神道理解に関する類型論的分析」、二―三頁を参照。

(52) 高橋吾良『諸教便覧』（第五耶蘇教）、八四頁。

(53) 高橋吾良『諸教便覧』（第五耶蘇教）、九一―九二頁。

(54) 高橋吾良『諸教便覧』(第五耶蘇教)、九二―九三頁。原文には、「其救極ノ法」の部分の「極」が「木」へんではなく「手」へんである。

(55) 高橋吾良『神道新論』(第一章)、五〇頁。

(56) 高橋吾良『神道新論』(第一章)、七〇頁。引用文の前の部分は以下を参照。「神典ヲ以テ糊説ト為ス論者ハ吾此解釈ヲ見バ直チニ余ト多クハ意ヲ合セラル可ケレドモ之ヲ以テ神道ト為ス論者ハ容易ニ吾説ニ服セラレザル可シ是故ニ今別ニ其論者ニ告グ我等俯仰シテ宇宙ノ万物ヲ観察スルニ大造化主ノ有ルコト実ニ昭著明白ニシテ疑フ所ナシ又我等物理ヲケンキュウスルコト愈々深ケレバ愈々其造物主ノ大慧大能ヲ感ズルニ至ル是ヲ以ヨ余ハ深ク造物主宰神アルコトヲ信ズルナリ因テ固ヨリ無神説ヲ宣ル者ニハ非レドモ其造物主宰ハ唯一ノ神ナル可クシテ決シテ尋常ノ國学者ガ説ク如キ神々ニハ非ルナリ是実ニ聖賢ノ認識スル所ニシテ諸学問ノ然リトスル所ナリ是故ニ神ニ事ヘント欲スル者ハ必ズ其唯一ノ造物主ヲ崇拝ス可キナリ其余ハ皆此造物主ガ造リ成シタル物ニシテ神々ニハ非ズ而シテ之ヲ拝スルハ固ヨリ理ニ背キ道ニ戻ル事ナリ且又我國人ガ其諸物ヲ拝セシコトハイジョウニ論述セシ如ク全ク古伝ノ誤解ヨリ出タル物ナレバ既ニ其根拠トスル所ノ者アル事ナシ然レバ即チ國学者ハ何ニ拠テ此後其妄論ヲ維持セントスルヤ学問ニ由テ之ヲ維持センカ彼ラ若シ学問ニヨレバ益々其身ノ誤謬ヲ知ルニ至ラン然ラバマタ何ニ依ランカ迷妄ヲ除クノ外世ニハ実ニ之ヲ支持スル者アルコトナシ而シテ迷妄ハ拠ト為スニ足ラザル者ナリ此廣キ世ニ既ニ彼等ガ説ヲ支持スルモノナキトキハ彼等ハ速ニ其非ヲ悔テ之ヲ棄テザル可ラズ」

(57) 高橋吾良『神道新論』(第一章)、一頁。

(58) 高橋吾良『神道新論』(第一章)、四九頁。

(59) 「教部省達教則第三ヶ条ヲ以テ神道宗徒ノ教本トセンカ此三箇ノ教則タル只是レ人類道徳一般ノ規則ニシテ此規則ノ尊崇ス可キハ神官教導職ニ限ルナク佛教宗徒ト雖モ我日本國ノ臣民タラバ此教則ニ遵ハザル可ラズ三條教則ヲ見ルニ第二條ハ天理人道ヲ明ニス可シト云ヒ第三條ハ皇上ヲ奉載シ朝旨ヲ遵守セシム可シト云フ若シ夫レ天理人道ヲ破リ我國臣民ノ列ニ在リ乍ラ我皇命ヲ奉ゼザル者アラバ是國法ヲ破リ國民ノ義務ニ背ク者ナレバ只道徳ノ罪スルノミナラズ法律ノ決シテ黙視セザル所ナリ只教則第一条敬神愛國ノ敬神ノニ字ハ恰モ宗教ニ彷彿タル語気ヲ顕ス如クナレモ此神トハ如何ナル神ヲ指ス者ナル乎若シ彼ノ耶蘇宗徒ガ言フ所ノ造物主トセバ我神道宗ハ耶蘇宗ト其区別ヲ失ウニ至ラン」(高橋吾良『諸教便覧』(第一神道)、四―五頁)。

(60) 高橋吾良『諸教便覧』(第一神道)、一頁。

(61) 『日本キリスト教歴史大辞典』教文館、一九八八年、七〇

四頁。

(62) 明治期のプロテスタント受難者である二川（小島）一騰が全面的に協力したこの書物は、ある神道家とキリスト教信徒が対話する形式である。

(63) 「此教ニテハ不善ノ念、不義ノ行ヲ厳禁シテ人ノ嗜慾ヲ縦ニスルコトヲ許サヾルガ故ニ我國ノ人多ク之ヲ信ズルヲ難シトス又神佛ニ道ノ教導職等已レノ道ノ滅センコトヲ恐レテ力ヲ尽シテ之ヲ防グ但シ佛徒神官等ノ中ニハ無根ノ忘言ヲ吐テ耶蘇教ヲ誣ル者アリ大ニ世人ヲシテ其判断ヲ誤ラシム是実に嘆ズ」（高橋吾良『諸教便覧』十字屋、一八八一年、九六頁）。

(64) 「可キ事ナリ又聞クニ天主教ヲ伝フル者及ビ「グリイキ」教ヲ宣ル者ノ中ニハ金銀ヲ示シテ人ヲ誘ク者アリト云フ是ハ誠ニ其教ノ罪人ナリ天主教ト「グリイキ」教トハ本文ニモ言ヘル如ク耶蘇ノ言ヲ曲テ教フル所アリ我ノ考案ニ依レバ此ニ宗ハ余リ願ハシカラヌ者ナリ但シ英米ニ國ノ教師ガ伝フル所ハ全ク其教ノ経典ニ依ルナレバ眞ノ耶蘇教ナリ人々善ク之ヲ聴キ理ヲ以テ之ガ真偽ヲハカレ」（高橋吾良『諸教便覧』、九六―九七頁）。

(65) 小崎弘道「博覧強記の人・高橋五郎氏の死」『基督教世界』『植村正久と其の時代』第四巻、一六三頁。しかし同時に紹介された一般の『読売新聞』の「高橋五郎氏を悼む」という記事には「先生は、英学以外に漢学がよく出来たし、仏教の素養もあった」とし、神道に関する基督教側からの見解は強調しなかった（『植村正久と其の時代』第四巻、一六五頁）。

(66) 桜井吉松『高橋五郎』博文閣、一八九三年、一五頁。